

第51回皮膚かたち研究学会学術大会 開催報告

(2025年6月21・22日)

東京医科大学第一講堂

前 賢 一 郎 (東京医科大学皮膚科学分野講師)

原田 和俊 (東京医科大学皮膚科学分野主任教授)

はじめに

第51回皮膚かたち研究学会学術大会を、2025年6月21・22日の両日、東京医科大学第一講堂(第一校舎)にて開催いたしました。梅雨時の蒸し暑い時期にもかかわらず、全国から82名の先生方にご参集いただきました。

皮膚科関連の学会は通常、ホテルのイベントホールや会議施設で行われることが多い中、今回は大学校舎の講堂を会場といたしました。第一校舎は1929年竣工の鉄筋コンクリート造で、東京医科大学の歴史と伝統を象徴する建物です(写真1)。第二次世界大戦中の東京大空襲では防空壕として機能し、顕微鏡や図書など貴重な資料を戦火から守ったと伝えられています。



写真1 会場となった東京医科大学第一校舎

古い建物ゆえエレベーターはなく、遠方からお越しの先生方には、第一講堂のある3階までスーツケースを持って階段を昇っていただくこととなり、ご不便をおかけしました。一方、講堂は傾斜のある階段教室で、多数のモニターが設置されており、後方席からでもスライドがみやすい環境でした。歴史ある講堂での開催は、参加者の皆様に学生時代を思い起こさせるような独特の雰囲気をもたらした(写真2・3)、その場の空気が活発な議論を促したように感じられました。

学術プログラム

2日間にわたり、「かたち」に関連する一般演題21題に加え、2つの特別講演が行われました。

特別講演1では、神戸大学皮膚科学分野教授・久保亮治先生に「長島型掌蹠角化症」についてご講演いただきました。本疾患は杏林大学名誉教授・長島正治先生が独立疾患として提唱し、その後、弘前大学皮膚科学講座教授の橋本 功先生と三橋善比古先生によって命名されました。2013年、久保先生により原因遺伝子SERPINB7バリエーションが同定され、この研究には三橋先生も大きく寄与されました。三橋先生は2007～2014年に東京医科大学皮膚科学分野教授を務めら



写真2 第一講堂内の様子

れ、2010年には第37回の本大会を主催されています。今回は、学会に多大な貢献をされた三橋先生ゆかりのテーマとして本疾患を取り上げました。

特別講演2では、東京医科大学皮膚科に深い関わりのある北村包彦先生について取り上げました。北村先生は東京帝国大学皮膚科・泌尿器科に入局後、長崎医科大学教授、東京帝国大学皮膚科学講座教授を歴任され、退官後は東京医科大学の第6代教授、さらには学長を務められました。1943年には網状肢端色素沈着症を報告し、その原因遺伝子*ADAM10*が2013年に名古屋大学皮膚科教授・秋山真志先生らにより同定されています。本講演では、東京医科大学皮膚科学分野の入澤亮吉先生が北村先生の生涯を紹介し、秋田大学皮膚科学・形成外科学講座教授・河野通浩先生が「網状肢端色素沈着症の原因遺伝子と類似疾患」について解説されました。河野先生は*ADAM10*の同定における中心的研究者です。



写真3 会長・原田和俊先生の挨拶

おわりに

歴史ある大学講堂という特別な空間で、通常の学会とはひと味異なる雰囲気の中、活発な討論と知的交流が展開されました。本大会を無事に終えることができましたのは、ご参加くださった先生方、ご支援賜った企業の皆様、そして事務局を担当されたヤマウチクリエイトの皆様のご尽力の賜物です。ここに深く感謝申し上げます。